

## 新 刊 紹 介

L'abdomen et les genitalia des femelles de Coléoptères Adephaga. Par Thierry DEUVE. *Mém. Mus. Hist. nat. Paris*, 155: 1-184 (1993).

今からちょうど4年半前、本誌第17巻1号に掲載された「オサムシ亜目の新しい分類体系」と題する小文で、わたしは、DEUVEによって提唱されたオサムシ亜目の分類体系と、その根拠になった腹節の特徴を、やや詳しく紹介した。フランス昆虫学会の機関誌に掲載されたDEUVEの論説は、パリ第六大学に提出された学位論文から、もっとも重要な部分を抜き出して講演原稿にまとめ、それを一部手直して公表したものであった。学位論文そのものは出版されなかったが、マイクロフィッシュに作成されて関係研究者に配布されたので、1988年に版權を確立した形にはなっている。わたし自身も、このマイクロフィッシュで論文の全容を承知していたが、拡大読取り器で読むには大部にすぎ、全文を拡大して焼き付けるのも費用の点で一般向きではなく、しかるべき形で印刷公表されるのを待ち望んでいた。

ようやく今年の3月になって、この重要な論文がパリの国立自然史博物館から出版され、だれでも手にすることができるようになった。博物館紀要の一冊として刊行されているので、マイクロフィッシュとちがって読みやすく、豊富な挿図の見易さがとくにすばらしい。内容の大部分は原文のまま採用されているが、標題だけは「オサムシ亜目甲虫類の腹部と雌の外胚葉性生殖器官に関する形態学的ならびに系統学的研究」という長い原題から、上記の簡潔な形に変えられている。

ところで論文の内容だが、結論の重要な部分は、先に紹介したことでほぼ尽くされているといっても過言ではない。パリの博物館に所蔵されている老大な標本を駆使し、さまざまな角度から精細な研究を積み重ねた著者が、腹節構造の特徴に基づく系統論議だけを取りあげて先に公表した理由も、おそらくこのあたりにあるのだろう。もちろん、腹節構造以外の部分に関する研究が、無駄な結果に終わったというわけではない。それどころか、オサムシ亜目甲虫類の雌の内部生殖器を、これほど広汎かつ詳細に調べた研究はほかに例がなく、その一事だけでも著者の業績は刮目に値する。しかも、比較的「下等」な群では、著者の定義する科ごとに特徴が定まり、比較的「高等」な群では、全体を通じて基本的な構造が均一であること、マルクビゴミムシ類が、ムカシゴミムシ科やカワラゴミムシ科とともに、水生食肉類と共通の特徴をもち、狭義のオサムシ類を含むほかのゴミムシ類とは大きく異なっていることなどは、雌の内部生殖器の研究から導き出された重要な結論である。これが腹節構造の研究から導かれた結論と組み合わせられて、科の範囲を決定する基準になったのだろう。

甲虫類の雌の生殖器は、雄のものに比べて、これまでなおざりにされることが多かった。とくにオサムシ亜目では、同じ亜科のなかで分化の認められる例が、一部のものを除いてひじょうに少なく、ほとんど興味の対象にならなかったといってよいだろう。しかし、DEUVEの研究によると、亜目のなかの高次分類や系統論議には、雌生殖器も重要な特徴になることがわかる。カブトムシ亜目の甲虫類については、雌生殖器の研究を近年よく見掛けるようになった。日本でも、斉藤明子(1989-'93)によってカミキリムシ類の雌生殖器が詳しく研究されたが、その結論がある面でDEUVEの結論と似ているのは、単なる偶然の一致でもなさそうに思われる。

(上野俊一)